| | |
|---|---|
| 研究課題 | SEL を核としたカリキュラムの作成 |
| 副題 | 非認知能力を育み、人間性にアプローチする |
| キーワード | SEL、システム思考、デザイン思考、対話鑑賞 |
| 学校／団体名 | 三田国際学園中学校・高等学校 |
| 所在地 | 〒158-0097 東京都世田谷区用賀 2-16-1 |
| ホームページ | https://www.mita-is.ed.jp/ |

研究の背景

日本では道徳教育は定着しているが、 SEL (Social Emotional Learning - 社会性と情動の学習）の活用についてはまだ初期段階である。 海外では中高生の健やかな成長（ウェルビーイング）と学力向上にとって、SEL が重要だという認知が広がっており研究が進んでいる。本学園は国際学園であることから、生徒の約半数が海外での生活、またはインターナショナルスクールでの生活経験を持つ生徒である。生徒たちはそれぞれの家庭環境、生活経験から、多様な価値観と思考を持ており、学園内にはダイバーシティが溢れている。この環境の中で、多様な生徒の人間性の向上を図るには、倫理的能力、社会的規範を身につけることで個人の価値観を育み、善良な市民を育てるという道徳活動のアプローチと、自らが自分の感情に気がつき、実践を通じて自己や他者への理解を深め学校や社会で協働していくスキルを高めるという個人起点の SEL アプローチの両者が必要である。

そこで、まだ日本では馴染みの薄い SEL を活用した人間性へアプローチをかけるカリキュラムの開発が課題となった。

２．研究の目的

コロナ禍、VUCA 時代など教育を取り巻く社会情勢は大きく変化している中、主体的で対話的な深い学びの実現が強く求められている。求められる学びの実現には、認知能力と非認知能力の双方が必要である。成長マインドセット、エイジェンシー、コンパッション、社会情動的スキルなどのソフトスキルは認知能力のパフォーマンス向上に強い影響を与えると感じている。生徒 1 人 1 人が学びに主体的に取り組みやすい環境を整備することが学校使命である。

本研究ではその達成に向け”SEL“を活用し、人間性へアプローチをかけるカリキュラムの開発と実践を行う。社会で活躍するために必要な知識だけではなく、社会情動的スキルや物事をつながりでみる思考を通じて、豊かな人格を育み、自己、他者の個性や得意なスキルを活かし、本学園の建学の精神である発想の自由人として世界・社会の創造に貢献していける Wellbeing な生徒の育成を目的とする。

３．研究の経過

以下、研究経過をまとめる。実践研究は中学２年生を主体として実施した。本研究は以下を実践の柱とする。

（１）研究担当教員による研究会

研究会メンバーで週に１回のペースでミーティングを行い、中学生に向けた SEL を活用したカリキュラムの開発、授業実践、リフレクションを行う。

（２）授業実践

外部の専門家とコラボレーションし、SEL を活用した人間性へアプローチをかける授業カリキュラムの開発と総合学習、ホームルーム、特別授業の中でカリキュラム実践を行う。

（３）校内の教員研修

SEL（Social emotional learning＝社会と情動の学習）、NVC（Nonviolent Communication＝非暴力コミュニケーション）、システム思考、インプロ、アート思考などの概念を学ぶ勉強会を開催し、先生方の学びの場づくりを行う。

（４）学外の教員研修や研究会への参加

学外の研修や研究会へ参加し新たな知識、資質、スキルを獲得し校内に持ち帰る。

| 時期 | 取組内容 | 評価のための記録 |
|---|---|---|
| ４月 | 研究及び組織の確認・研究内容の共通理解<br>年間計画及びカリキュラム案の検討<br>全体教員研修の実施①<br>インプロワークショップカリキュラム案の検討<br>外部研修会への参加 | <br><br>振り返りフォーム<br>専門家との情報交換 |
| ５月 | インプロワークショップ　教員向け事前研修<br>中２インプロワークショップ<br>システム思考カリキュラム案の検討<br>外部研修会への参加 | 振り返りフォーム<br><br>専門家との情報交換 |
| ６月 | システム思考　教員向け事前研修<br>中２システム思考ワークショップ<br>南アルプス子どもの村小学校・中学校　視察（山梨） | 振り返りフォーム<br><br>他校との情報交換 |
| ７月～<br>８月 | 全体教員研修の実施②<br>デザイン思考　カリキュラム案の検討<br>夏期講習　システム思考実施<br>デザイン思考カリキュラム案の検討<br>外部研修会への参加 | 振り返りフォーム<br><br>専門家との情報交換 |
| ９月～<br>10 月 | 中２デザイン思考ワークショップ・外部研修会への参加<br>21 世紀の教育　インタビュー会への参加（軽井沢） | 振り返りフォーム |

| | | |
|---|---|---|
| | TQ Feel° C Walk＆対話鑑賞②　カリキュラム案の検討<br>外部研修会への参加 | 専門家との情報交換 |
| 11 月 | 中 2　 TQ Feel° C Walk＆対話鑑賞<br>外部研修会への参加 | 振り返りフォーム |
| 1 月～<br>2 月 | 全体教員研修の実施③<br>対話鑑賞②　カリキュラム案の検討<br>中 2 対話鑑賞②　アレグリア鑑賞会の実施<br>外部研修会への参加 | 振り返りフォーム |
| 3 月 | 課題研究のリフレクションとまとめ<br>外部研修会への参加 | 振り返りフォーム<br>成果報告 |

４．代表的な実践

実践①　インプロヴィゼーション

実施日：5 月 11 日（水）

ゲスト講師： 村松ひろこ（プレイキッズシアター代表）・山崎 智仁（ブリッジラーニング副代表・慶應義塾大学 SFC 研究所上席所員）

時間：12 時 20 分～16 時

“体と言葉がつながり、解放される感覚を持つ”を焦点とし、以下のことを目的として開発したカリキュラムを実践した。

（目的）

・自分は失敗したときや人と関わるときにどのような反応をしているのか。それらを思考ではなく、実体験から知る。「動き」や「関わり」から自分を発見する。

・活動を通じて、コミュニケーションは「こういう時にはこうしたらいい」というものではなく、「目の前の人とよい時間を過ごすためには？」を身体的に学んでいく。

・活動を通じて、創造的になること、他者と協調、共創することを実践的に学ぶ。

（カリキュラムの流れ）

（１） アイスブレイク（警察と泥棒・チェックイン）／写真 1

（２） ワーク①　何をやっているところでしょう

ワーク②　Tree／写真 2

ワーク③　拍手まわし

ワーク④　１．２．３イエイワーク

ワーク⑤　連想ゲーム

ワーク⑥　ワンワード

（３） リフレクション

写真１　アイスブレイクの様子

写真２　Tree の活動のようす

実践②　システム思考
実施日：6 月 14 日（火）
ゲスト講師：福谷 彰鴻（システム思考教育家・長野県立大学客員准教授など）
時間：12 時 20 分～16 時
“ものごとをつながりで観る”を焦点とし、以下のことを目的として開発したカリキュラムを実践した。
（目的）
物事の全体像を捉え、さまざまな要素とのつながりと相互作用を理解することで、真の変化を創り出すためのアプローチを考えるための思考の習慣を経験する。
（カリキュラムの流れ）
（１）システムは不思議な動きをする
インプット：システムとは？／写真３
クラス内ワーク①：トライアングル
クラス内ワーク②：ワーク①で起きたことのループ図
クラス内ワーク③：グループ対話
（２）メンタルモデルの力はあなどれない
インプット：メンタルモデルとは？
クラス内ワーク④：指相撲からみえるメンタルモデル
クラス内ワーク⑤：モンキー・ビジネス・イリュージョンからみえるメンタルモデル
クラス内ワーク⑥：グループ対話
（３）大きなシステム
クマが出た動画視聴
クラス内ワーク⑦：“クマが出た”をつながりでみる氷山モデル
クラス内ワーク⑧：グループ対話
（４）　リフレクション

写真３　システムとは

## ５．研究の成果

### ５－１：:カリキュラムの開発と実践

中学２年生、7 クラス 253 名を対象にカリキュラム実践をおこなった。研究者である２名がカリキュラムを作成し、各クラスの担任、副担任の先生に事前の研修を通じてカリキュラムの目的と内容を共有し 15 名で運営をおこなった。1 年を通じて半日（4 コマ）で実施する 5 本のカリキュラムと 45 分（1 コマ）で実施する総合の時間のカリキュラムを 25 コマ、夏期講習などの特別授業で実施するカリキュラム 8 コマを作成、実践することができた。SEL（社会性と情動の学習）を活用した授業実践は散見されるが、小学校での実践がほとんどで中学校での年間を通じた実践事例はあまりない。特別授業や総合学習における年間カリキュラムとその実践事例を示せたことの意義は大きいと考える。

### ５－２：学習カリキュラムの効果

八つの社会的能力を測定するために小泉ら（2011）が開発した「中学生用社会性と情動の学習 8 つの能力尺度Ⅱ」（SEL-8JHS 尺度Ⅱ）を使用した。子の尺度は８つの社会的能力をそれぞれ 3 項目ずつ計 24 項目の自己評価尺度と、2 項目の虚偽発見尺度を合わせた 26 項目で構成されている。各質問項目に対して“全然当てはまらない”“あまり当てはまらない”“時々当てはまる”“良く当てはまる”等の４件法（１から４）で生徒から回答を求める自己評定調査をおこなった。同時に、Google フォームを使用しリフレクションもおこなった。

表１　社会的能力の評定平均値 n=245

| 社会能力 | | 素点平均値 | |
|---|---|---|---|
| | | 学校 | 全国 |
| 基礎的 | 自己への気づき | 3.34 | 3.47 |
| | 他者への気づき | 3.33 | 3.43 |
| | 自己のコントロール | 2.85 | 2.95 |
| | 対人関係 | 3.01 | 3.03 |
| | 責任のある意思決定 | 2.92 | 3.13 |
| 応用的 | 生活上の問題防止スキル | 3.33 | 3.38 |
| | 重要事項対処する能力 | 2.79 | 3.1 |
| | 積極的・貢献的な奉仕 | 3.38 | 3.43 |

校内（2023）・全国（2011）

図１：磨かれたと思う力

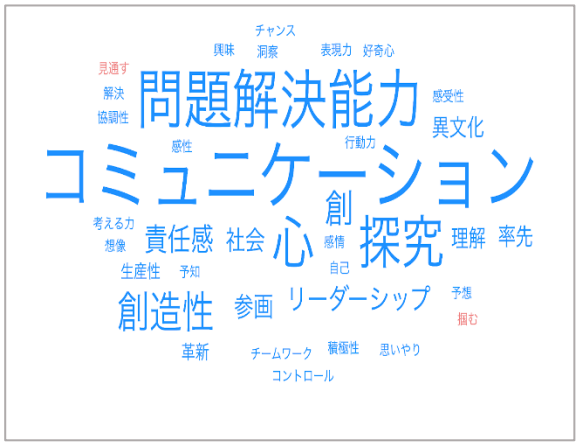


表１の評定結果や図１の磨かれたと感じる力、複数の教員による行動観察の結果分析を通して、本研究で開発したカリキュラムは世界・社会の創造に貢献していける Wellbeing な生徒の育成する上で有効であると一定程度示すことができた。

６．今後の課題・展望

本カリキュラムを担当した教員たちは生徒たちの変容する手ざわりを、授業中の様子や、学校行事、部活動、休憩時間のようすから見取っている。しかし生徒の自己評価の結果から、本研究では生徒自身にカリキュラムの効果を十分に認知させることができなかった。社会情動的スキルや物事をつながりでみる思考を通じて、豊かな人格を育み、自己、他者の個性や得意なスキルが活かされて効果が現れるには数年かかると感じている。今後、中学 1 年生及び中学 3 年生、高校生を対象としたカリキュラムを作成し、継続した活動を展開する必要がある。また、本研究を継続して行い、中学、高校という多感で繊細な発達段階にある生徒たちに本カリキュラムの目指す力を育成するために開発的生徒指導の在り方について広く提言する必要がある。

７．おわりに

本研究は「SEL を核としたカリキュラムの作成」を主題に，副題として「非認知能力を育み、人間性にアプローチする」とし、授業カリキュラム開発と実践を行ってきた。パナソニック教育財団から研究助成を受け，StudyHall と総合学習の時間に取り組むことができた。研究メンバー、学年団、そして外部専門家の方との関わりの中で研究を深めていくことができたと感じている。今年度の取り組みをよりオーセンティックなものへと変容させること、そして広げていくためにも、取り組みをリフレクションし、来年度以降も継続的にカリキュラムの開発と実践を行っていきたい。また、本学園内だけではなく、多くの場所で SEL を活用したソフトスキルを磨く授業が実践されるよう活動していきたい。最後に，このような機会を与えていただいた，パナソニック教育財団関係者の皆様に深くお礼を申し上げます。

８.参考文献

１，小泉令三・米山祥平（2011）:「中学生用社会性と情動の学習 8 つの能力尺度Ⅱ」（SEL―8 JHS 尺度Ⅱ）の作成

2，小泉令三：社会性と情動の学習(SEL-8S)の導入と実践（子どもの人間関係能力を育てる SEL-8S 1）

３，小泉令三：社会性と情動の学習(SEL‐8S)の進め方:中学校編（子どもの人間関係能力を育てる SEL-8S 2）

4，ダニエル・ゴールマン（著)，ピーター・センゲ（著)，井上英之（監修，翻訳):
21 世紀の教育 子どもの社会的能力と EQ を伸ばす 3 つの焦点